

優秀賞

住宅の部

建築主：柳 光彦・柳 幸子
設計：野口修アーキテクトアトリエ
施工：株式会社中野工務店
所在地：市原市ちはら台

部屋を家に開く、家をまちに開く

ちはら台の家



リビング入口を見る

(撮影/垂見写真事務所)

築19年、軽量鉄骨造の建売住宅のリノベーションである。125㎡の戸建て住宅は、夫婦二人にとっては広い。改修前は、部屋から一度出て、廊下や階段を通りトイレや浴室に行くのがともかく寒かったという。断熱性能の向上に加えて、居室を廊下や階段に開いて一体化したことにより、温熱環境の満足度がぐんと高まった。設計者が得意とする木の風合いを活かしたリビングがお気に入りだ。一般に20年ほどすると家族構成や経済状況が変わり、家に手を入れてみたいと思うものだ。だが、分譲住宅のリノベーション自由度は低い。この家の場合も、まずはハウスメーカーに問い合わせたが間取りの改変は無理だと言われたという。これが先例となって、戦後ベッドタウンとして発展した地域の広がる千葉県で、できないと諦められていた改修が広がることを期待したい。建替えは生活のリセットだが、改修はアップグレードである。

この家は、意匠も大きさも、大同小異の戸建て住宅が行儀よく

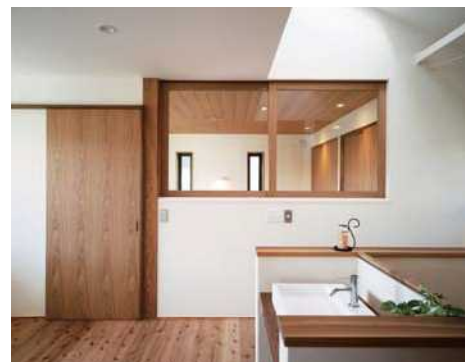
並んでいる典型的な郊外住宅地にある。今回の改修にあたって、玄関脇の一室を治療室とした。ご主人が鍼灸師で以前は訪問で行っていたが、今では自宅に招き入れて施療している。リビングにもいろんな人が訪れるようになった。将来的には2階の一室を治療に訪れた人たちに開放することも考えているそうだ。成熟した郊外住宅地に、こうした小さなコミュニティビジネスが生まれてきている。内向的なマイホーム空間が均質に並ぶ郊外から、家をまちに開く郊外へ、一軒の家の創造的なリノベーションに変化の胎動を感じた。

(岡部 明子)



リビングからキッチンを見る

(撮影/垂見写真事務所)



2階ホール

(撮影/垂見写真事務所)